

修士論文要旨

中島 葵

『和莊兵衛』の思想性

本稿は、安永三年に刊行された談義本『和莊兵衛』より見受けられる作者の思想性について論じたものである。この作品は、老莊思想を基に世俗の庶民強化を目的として、実社会への諷刺性を持つ六つの異国を巡る異国遍歴小説である。各異国の最後には「養生」と題して、世俗の人々に対する作者の教訓が加えられており、冒頭の自序を含めた作品全体から、老莊思想、特に『莊子』享受の主張が見受けられるのである。その為、従来の研究では、これらを前提として展開された研究が多く、作者に与える無意識下での思想の影響について言及する研究はなされていらない。しかし、その諷刺性や教訓性の観点から、老莊思想だけではない他思想による影響が多分に確認できるのである。よって、本稿では、儒教・仏教・神道などの当時の学統と『和莊兵衛』の本文を照合し、作者の他思想による影響の可能性を指摘することで、作品内から読み取れる思想性の性質を明らかにすることを目的とする。

第一章では、『和莊兵衛』刊行に至るまでの思想的状況を江戸時代前期と江戸時代中期に分け、近世思想史の確認を行った。まず、幕藩体制下での朱子学の推進について、林羅山が林希逸の『三子庸齋口義』の受容を経て、朱子学日本化の初期の様相を述べた。続いて、新たに伊藤仁斎や荻生徂徠などの古学派によって、各々がより自由

な形で様々な思想形成を繰り返す百家争鳴の時代について言及し、それらが一切梃山などの戯作者によって文芸の世界に影響していく一連の過程を確認した。

このような時代背景を踏まえて、第二章では、『和莊兵衛』における他思想からの影響の有無を明らかにするため、「養生」本文と『莊子』、及び他学統の各典拠との照合を行なった。その結果、儒教の『六論衍義大意』や『孟子』、大乘仏教の『四條金吾殿御返事』や神道の『倭姫命世記』、さらには『都鄙問答』『石田先生語録』『石田先生事蹟』等を典拠とする石門心学など、多岐にわたる思想の影響が確認でき、それらが習合的思想となつて「養生」の教訓、ないしは作者の思想を形成していることが分かった。また、この習合的思想がどのような性質を持っているのかについて、石門心学の開祖・石田梅岩と比較しながら双方の共通する思想観を明らかにし、梅岩と遊谷子の思想形成の性質の一致を指摘した。

結論として、『和莊兵衛』の教訓性には、作者が主張する思想に加えて、他学統からの様々な影響が見受けられ、それらは作者の無意識下での思想形成によるものであると考えられる。このような習合的思想はそのまま作品に反映され、その思想の性質は石田梅岩と類似していることから、作者・遊谷子が石門心学を学んでいた可能性が指摘できるであろう。本稿は、従来あまり言及されていなかった遊谷子の人物研究において、作者の思想性という観点から新たな人物像の可能性を提示するものである。

中村 友美

建部綾足の読本について——『西山物語』を中心に——

建部綾足は江戸時代中期の文人であり、和歌・俳諧・片歌・隨筆・画・読本・国学など、多くの芸術活動を行った人物である。本稿では綾足が伊勢物語研究を積極的に行っていた時期に焦点を当て、同時期に刊行された読本作品『西山物語』を題材として、伊勢物語研究によって得られたものが、作品にどのような影響を与えていたのかという点について考察した。綾足の国学研究と作品の執筆との関連性を調べ、そこで得たものがどのように作中に表れているのかということ、作品の内容と作中の歌について調べることで明らかにした。

第一章では、国学の師である賀茂真淵の伊勢物語に対する解釈を参考にし、その考えを継承した綾足が、『伊勢物語』の話の構造や和歌をどのように解釈し、発展させたのかという点について調べた。結果として綾足は、真淵の考えを継承し、『伊勢物語』を事実と虚構を織り交ぜて作られた、実録とは異なった物語であると捉えていたことが明らかとなった。それをうけて、次章では実際に『西山物語』の本文内容にこの考えが表れているのかという点について検証を行った。

第二章では、『西山物語』の内容が題材としている事件と乖離していることに着目し、伊勢物語研究の影響がどのような点において見られるのか確認した。具体的には、事件の関係者と登場人物について、作中に登場する宝刀とそれに関わる崇り・怪異についてを取り上げ、同じ事件を題材とした作家、上田秋成の綾足批判を通して

みる『西山物語』の事件への忠実性と、綾足が作品を執筆するうえでどのような事を重視していたのかという点について考察した。結果として、綾足は伊勢物語研究を通して、事実と虚構を織り交ぜて物語を作ることで実録とは異なる自立した物語を作るという意識を獲得し、それを『西山物語』にも反映させていたために、実際の事件と意図的に距離を置いて、作品を展開させたのではないかと考えるに至った。また、そうした創作の比率が大きい作品として書き上げられた理由として、綾足が読本を執筆するうえで、実録のようなものではなく、自らの学問的な成果を示し、さらに実験的に新しい試みを行う場として、物語を活用することを目的としていたということがあげられるのではないかと考察をもつて論を展開した。

第三章では、『伊勢物語』と『西山物語』は古歌を引用する際の特徴に類似性があり、伊勢物語研究の成果が読本の中であらわれていることを明らかにした。『伊勢物語』の和歌にみられる特徴を四つあげ、それがどの程度反映されているのかを調べた結果、四つ中三つの特徴を確認することができた。

以上のことから結論として、本稿では、綾足の伊勢物語研究と『西山物語』の影響関係を調べることで、綾足は『伊勢物語』の研究を通して獲得した知識や作品に対する考え方を、読本の執筆という形で作中に表現していたのだという結論に至った。